

大阪府感染症発生動向調査週報（速報）

2019年 第14週（4月1日～4月7日）

今週のコメント

～インフルエンザ～咳エチケット、手洗い、マスクの着用が重要

定点把握感染症

「インフルエンザ 減少続く」

第14週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,079例であり、前週比5.8%減であった。定点あたり報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、伝染性紅斑、咽頭結膜熱・手足口病の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.33、1.85、1.01、0.52、0.43・0.43であった。

感染性胃腸炎は前週比3%減の1,061例で、南河内8.63、中河内7.65、大阪市西部7.60、大阪市南部5.83、北河内5.74である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は前週比14%減の369例で、南河内3.38、北河内2.63、中河内2.25であった。

RSウイルス感染症は前週比12%減の201例で、大阪市西部2.20、大阪市南部1.56、北河内1.52である。

伝染性紅斑は前週比3%増の103例で、中河内1.35、大阪市北部0.71、大阪市南部0.61であった。

咽頭結膜熱は前週比9%減の85例で、中河内0.90、北河内0.85、泉州0.76である。

手足口病は前週比5%増の85例で、北河内1.41、中河内0.85、大阪市南部0.67である。

インフルエンザは18%減の285例で、定点あたり報告数は0.94と1.00を下回った。北河内1.71、大阪市北部1.65、泉州0.97、堺市0.90、大阪市西部0.87である。

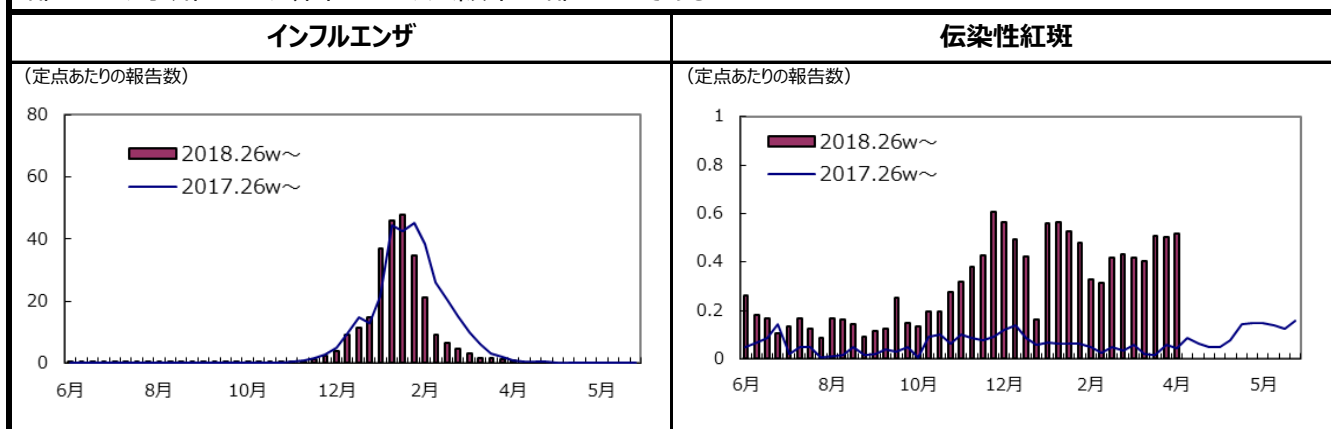


表 1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2019年 第14週4月1日～4月7日）

第14週の順位	第13週の順位	感染症	2019年 第14週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第14週の 定点あたり 報告数	2019年第14週の 年齢別 患者発生数 最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	5.33	3%減	4.97	1歳_17%
2	2	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.85	14%減	1.68	5歳_14%
3	3	RSウイルス感染症	1.01	12%減	0.43	1歳未満_47%
4	4	伝染性紅斑	0.52	3%増	0.05	6歳_19%
5	6	手足口病	0.43	5%増	0.05	1歳_40%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.94	18%減	0.86	20歳以上_32%

第14週のコメント

～梅毒～ 大阪府における2018年の梅毒感染者数は、1100例を超えました

全数把握感染症

梅毒

国内の梅毒の感染者は、2010年より増加傾向にある。大阪府における2018年の感染者数は、1100例を超え、前年比1.4倍を上回った。感染症法が施行された1999年以降、最も多く報告されている。梅毒は、性行為・オーラルセックスにより、生殖器、口、肛門の皮膚や粘膜の微細な傷口から菌が体内に侵入し感染する。また、妊娠時に胎児が胎盤を介して感染し、「先天梅毒」になることがある。梅毒は、適切な抗菌薬の投与で治癒が期待できる。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)
[梅毒とは\(国立感染症研究所\)](#)

(累積報告数)

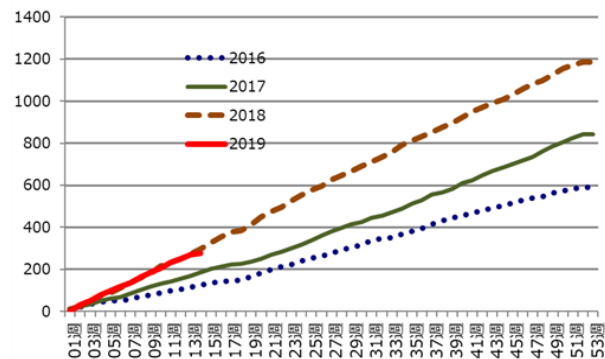


表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第14週4月1日～4月7日)

*) 注意 : この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
3類感染症										
腸管出血性大腸菌感染症	3	3								16
4類感染症										
A型肝炎	1								1	10
レジオネラ症(肺炎型)	1		1							13
5類感染症										
アメーバ赤痢	1						1			13
劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2							2		16
後天性免疫不全症候群	2								2	37
侵襲性肺炎球菌感染症	3							1	2	76
水痘(入院例)	1		1							7
梅毒	8	1				2			5	278
百日咳	10		1	1		1	1	3	3	261
風しん	5		1						4	103
結核 (2019年2月分)	結核 新登録患者数 : 141名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 62名)									(府内累積報告数 276名、内 肺・喀痰塗抹陽性 116名)

(2019年4月9日 集計分)